

Qumphi

- 久遠 -

Moon Studio

MOON Studio
1999 Winter

Quwpon

その星は地表の約八割が海で覆われており、約800万人ほどの人々が生活を営んでいる。大陸と呼べるほどの陸地は少なく、もっとも広いものでもオーストラリア大陸程度のものだ。各地の島々に人々は大小様々な国家を形成しているが、その中でもひとときわ異彩を放つ国がある。

海上漂流王国「クーウォン」

クーウォンはこの星の海上を漂流する、巨大な人工島である。核となるのは数隻の船だったと言われており、それらに寄生するかのごとく乱暴に連結された無数の小舟やいかだ。増築や改修を繰り返すうちに、それらは巨大な浮島となるに至った。

厳密に言うならば、原型を留めぬほどに巨大化した今も、自己航行能力が完全には失なわれた訳ではないから、漂流という言葉はふさわしくはないのかもしれない。だが、いつの頃からかクーウォンは海上漂流王国という別名を冠するようになっていた。

王国と言う以上、クーウォンには国王が居る。とは言っても、国王イコール支配者という訳ではなく、政治形態は共和制である。また、王位は世襲制ではなく、

だが、日常の中には王が王である意味はない。王としての務めなどは皆無に等しい。

現在の王、33代目久遠の任期満了まで、あと数日と迫っていた。

既に次代の「久遠」は決まっている。イステリアと呼ばれる一角に住む、椎葉・ユーリオという名の16歳の少女がそくだ。

イステリアの端にある棧橋から夕暮れの海を眺めつつ、椎葉は王に命じられたときのことを思い出していた。

椎葉はクーウォンに三つある学校の一つ、イステリア・スクール「高等部の二年生だ。そして、椎葉を34代目久遠に指名した羅針盤は、彼女のクラスの担任教師だった。

「椎葉さん。実は、君に王になってもらいたいんだ」

三日前の放課後、椎葉を呼びだした教師——羅針盤は、開口一番そう語った。

「は？」

「だから王。34代目の久遠になってもらいたいんだよ」既に、イステリアでケーキ屋を営んでいる星見役と

生涯を通じて在位するわけでもない。その主な規定は以下の通りだ。

- 1・王は25年に一度、「星見」「羅針盤」と呼ばれる者の合議によって、25歳以下の住民の中から選ばれる。この際、指名された住民に拒否権はない。
- 2・星見には女性が、羅針盤には男性がなり、王を任命すると同時に、王になったことのない35歳以上の住民から次代の星見および羅針盤を選ぶ。また、それぞれの役職の定員は一名とする。
- 3・王が不慮の事故などで死亡した場合は、1の規定に準じて選考を行う。
- 4・星見および羅針盤が不慮の事故などで死亡した場合は、住民による選挙で決められる。
- 5・星見および羅針盤は、王を任命した後は「長老」となり、自らが任命した王に対する罷免権を有する。
- 6・現在の王を任命した長老が二人とも死亡した場合、星見および羅針盤は次代の王の選考を10日以内に行い、王位の継承を行う。
- 7・王はクーウォンにまつわる、ある秘儀を継承する。ただし、その秘儀の発動に必要な二つの鍵は、星見と羅針盤が持つ。
- 8・王は「久遠」の名を継承する。

も話がついているという。

星見と羅針盤の合議で決定されてしまっているのだから逆らえない。

「なんであたしなんだろ……」

椎葉は小さくため息をつく。

学校の成績は決して良いとは言えない。運動が出来るわけでも人望があるわけでもない。

そんな椎葉の数少ない趣味の一つが、歌うことだ。昨年、クーウォンが立ち寄った島で手に入れた、古びたガットギターを片手に、街角で歌うことがある。しかし、普段住んでいるイステリアで歌うのは恥ずかしいから、歌うときは隣のノーセリアまで足を伸ばしている。

「まさか歌……？」

ノーセリアで歌っている姿を、先生に見られたのだろうか？ 一瞬そう思ったが、すぐに自分の考えを一笑に付す。

「……そんなわけないか」

歌は好きだが、決してうまい訳ではないと自分では思う。ギターの腕前だったかが知れている。

と、歌のことを考えていると、無性に歌いたくなってきた。陽が沈みきるにはまだ時間があるし、明日は

学校が休みの日だ。今から家に戻ってギターを持って、ノーセリアまで行って……

「うん。歌おう」

意を決し、椎葉は家のある方へと駆け出した。

仕事を終えて飲みに行く男達のすり抜けるようにして、椎葉は小走りに急ぐ。クーウォン中央にある「セントラルブリッジ」と呼ばれる建物がよく見える、ノーセリア北端にある小舟上の公園へと。

走ったり歩いたりを繰り返して四十分ほど。いつものベンチに座り、顔を見られないようにヴェールを被る。そのまましばらく、呼吸を整えたりギターのチューニングをしたりしているうちに、空は少しずつ青く、暗くなってゆく。

そして、椎葉の歌が始まる。

「とおく……雲を越える翼……」

遠く、雲を超える翼。

光る、空に白く染みる朝。

揺れる、ひとひらこぼれる羽。

歌う、身体溶けてくようで。

涙、心からこぼれる。

海へ身体から還る。

風が人を風いでゆく。

誰にも気付かれないままに。

で通信技師をしている、40歳の男性だった。顔も名前も知ってはいたのだが、実際に話をするのはこれが初めてだ。

歌いに行った翌日の昼、星見の女性が営むケーキ屋の片隅で、椎葉と仁介は向かい合って座っていた。すぐ隣には羅針盤の先生と星見も居る。

「あつ、そつだ。椎葉ちゃん……」

何かを思いだしたように、仁介は足下に置いてあったカバンを漁り始めた。

「あったあった。これだ」

そうして仁介が取り出したのは、どこにでもあるような手帳だった。白紙のページを開いて、ペンと一緒に椎葉へと差し出す。

「ここにサインしてくれないかな？」

「はあ？」

「いやー、うちの女房と娘が君のファンでね。なんでも『昨日は久しぶりに椎葉さんの歌が聴けた』って、娘がすごく喜んでてね。『実は次の王は、その椎葉ちゃんなんだよ』って言ったら、絶対にサインを貰ってこいって。あ、そつそつ！ 実はその娘ってのが君と同一年だね」

「ちよつとちよつと。仁介さん」

調子に乗って喋り続ける仁介を、羅針盤がたしなめ

椎葉は知らなかった。

見つけてはいけない、見つけると逃げてしまう歌姫として、彼女がノーセリアでちよつとした伝説になっていることを。

この公園に、椎葉の歌を聴くために、夕暮れになると多くの人々が隠れに来ていることを。

椎葉は知らなかった。

「椎葉ちゃんは、綺麗な声で歌うんだね」

初めて逢った33代目久遠、久遠・仁介・仁介・エージョンは、軽い挨拶に続き、そう言って穏やかに微笑んだ。

「ど、ど、ど……」

どうして知っているんですか、と聞こうとしたのだが、どもってしまつて声が出ない。

「どうして知っているのか聞きたい、って顔をしているね」

顔を真っ赤にして頷く椎葉。そして彼女は、自分がちよつとした有名人だったことを、仁介の口から思い知らされた。

「はつ、恥ずかしい……です……」

「どうして？ あんなに綺麗な歌を歌うのに」

33代目久遠こと仁介は、普段はセントラルブリッジ

た。

「おつと。失礼しちゃったね。そんな訳だから、ちよつとここにサインお願いできないかな？」

「は、はあ……」

断るに断り切れず、椎葉はペンを取った。

「ついでに、『美紗子さんと深雪ちゃんへ』って書いてくれる？」

言われるままに椎葉が書いたサインと宛名を上げしげと眺め、仁介は満足そうに手帳をしまい込んだ。

「ありがとつ。大事にするよ」

人なつこそつな笑みを浮かべる仁介。

椎葉は仁介に逢ったときから、なぜこの人が王に選ばれたのだろうか？ と、ずっと考えていた。仁介の笑みを見て、それがなんとなく判った気がした。

だが、そつすると次の疑問が湧いてくる。

「王様……」

「や、やめて貰えないかなあ？ そんな風に呼ばれるのは初めてだよ。エージョンさん、でいいからさ」

「じゃ、エージョンさん。どうして、私が王に選ばれたんですか？」

「……さあ？」

気まずそうに仁介は苦笑する。先ほどからいんな笑みを浮かべているが、どれもが特徴的な笑みで、相

手を和ませている。

「私が選んだ訳じゃないからね。その辺はこちらに座っている、星見さんと羅針盤さんにも聞いてくれるかい？ もっとも……」

「選考理由は、自分が指名した王が引退した後でないと教えられない決まりになってるの。ごめんなさいね」

そう言って、星見がにこにここと微笑んだ。明らかに、秘密を持っていることを楽しんでいるようだ。

「だってさ。だから私も楽しみなんだよ。なんで私なんかを王にしたのか、ってのを聞くのがね」

結局、その日はとりとめのない話に終始した。

家に戻るなり、椎葉はベッドに身体を投げ出し、大きくため息をついた。

「なーんか、拍子抜けしちゃったなあ」

仁介の写真は、雑誌や新聞で見たことがある。温厚そうな人そうだとは思っていたが、あれは温厚とかそういうレベルを通り越している。まさかあんなに軽い人だとは思わなかったというのが、正直な感想だ。

……なんだか、妙に落ち着かない。

ふと、部屋の片隅に置いてあるギターが目についた。

「歌に行こうかな……」

一瞬だけそう考えたが、やはりその気にはなれな

かった。自分の歌を心待ちにしてくれている人が居るのは嬉しいのだが、その存在を認識してしまった今は、照れくささや恥ずかしさの方が大きい。

「寝よ……」

起きていてももやもやするだけだ。こういう時は、さっさと寝てしまうに限る。

しかし、寝ようとしてあっさり眠れれば苦労しない。30分後、椎葉は夜のクーウォンを散歩していた。世界の悪い夜は海面への落下事故が多いため、出歩くことはあまり推奨されていない。夜間専門の巡視員や、立ち入り禁止になるエリアさえあるほどだ。だが、イステリア付近は落下防止用の柵も充分に整備されているし、他地域に比べて照明設備も整っている。散歩程度でお咎めはない。

王とはなんだろうか。椎葉はずっと考えていた。クーウォンに王がいることは誰でも知っている。しかし、王としての仕事がなんなのかということは誰も知らない。

王だからと言ってお金が貰える訳でもない。現に仁介だって、通信技師という仕事で生活費を稼いでいるはずだ。

王だからと言って尊敬される訳でもない。なぜなら、尊敬される理由がないからだ。王が、王として何をし

ているのか判らないのに、尊敬する者などいない。

それでもこのクーウォンには王がいて、もうすぐ椎葉自身が王となる。その意味も判らないままに。だから椎葉は、今の状況をどう捉えていいのか判らなかつた。覚悟をするにも、何に對して覚悟をしていいのか判らない。用意するにもすることがない。気負うものもない。王について知っていることは、その継承にまつわる規定だけだ。

二つだけ確かなこと。それは「王はクーウォンにまつわる、ある秘儀を継承すること」「王は久遠の名を継承すること。今の椎葉に判ることはそれだけだ。同時にそれは、やはり椎葉が王について何も知らないことを再確認させられることでもある。

そして、何も判らないままに王位の継承の日はやってきた。

「このクーウォンはね。元々は空を飛ぶ船だったんだ」セントラルブリッジの艦橋へと繋がるエレベータの中で、仁介はそう語った。

「船が空を飛ぶんですか？」

「そう。このクーウォンには、核となる船があるって言うのは知ってるよね？」

「はい。このセントラルブリッジの下にある船がそうだと、学校で教わりました」

クーウォンの母体となった数隻の船の中でも、一番大きな船の艦橋を改装したものがセントラルブリッジであると、授業で聞いた覚えがあった。

「海の上に空があり、空の上には宇宙がある。クーウォンは元々、その宇宙や空を飛べる船だったそうだよ」宇宙……

そういうものが有るとは知っていた。だがそれはあくまでも知識であり、人間がたどり着ける場所だと思っただことはなかった。

「クーウォンがどうしてこの星に辿り着いたのかは、私も知らないんだ。ただ、今から800年ほど前にこの星に来たことは確からしい」

仁介の言葉を聞き、椎葉はしばらくうつむいて考え込んでいたが、しばらくして顔をあげた。

「……なんだか、それって変です」

「何が変なのかな？」

「ニコニコとした笑みは崩さず、仁介が尋ね返す。まるで、椎葉が何を言おうとしているのが判っているようだ。」

「だって、この星に来た時期が情報として残っているのに、その理由については判らないなんてことがあるん

でしうか？」

「椎葉ちゃん。君はクーウォンが、800年前にこの星に辿り着いた船だつて事を知っていたかい？」

「いえ……あ！」

「そうか。そういうことだったのか。」

「それが、王が継承する『クーウォンにまつわる秘儀』なんですね？」

「その通り。それだけでもないけどね」

「ちょうどその時、エレベータが静止した。それに続いて小さなブザー音が鳴り、エレベータの扉が開く。」

「椎葉の目の前に、見たこともない光景があった。見たこともない機械の山と、ガラスの向こうに広がる空と海。」

「綺麗な景色だろ？」

「仁介が自慢げに胸を張る。」

「25年前に私が初めてここに来たとき、この景色を見て感動しちゃってね。そのまま、セントラルブリッジを職場に選んじやったくらいなんだよ」

「クーウォンの街から見る海や空と、目の前に広がる景色とは同じはずなのに、少し高い所から見ただけでこんなにも印象が変わるものとは思わなかった。」

「ガラスに近づくと、今度はクーウォン全体が見下ろせる。いつも歩いている道や、通っている学校さえも

が、視点を变えるだけでとても新鮮に見えるから不思議だ。」

「景色に見とれていた椎葉の肩を仁介が軽く叩いた。『それじゃ、上に行こうか。みんな仕事だしね』」

「仁介に言われて、椎葉は初めて他者の存在に気付いた。10名程度の人々が、仕事をしながら椎葉と仁介の方をちらちらと観察している。その中の一人が、二人の方へ駆け寄ってきた。まだ若い男だ。」

「あ。仁介さん、ちょっと判らないことがあるんですけど」

「今は用事があるから後にしてくれないか？」

「ういーっす。で、その子が噂の歌姫、椎葉ちゃんすか？」

「司郎!!」

「へらへらしながら椎葉に近づこうとした男——司郎を、仁介が珍しく厳しい声で怒鳴った。」

「へーい。すみませんね……」

「がっくりと肩を大げさに落とし、司郎は二人に背を向けた。が、その場から動かず、

「あーあ。こないだは『椎葉ちゃんのサインもらっちゃったよ。いやー、王の役得だよねえ』なんて言つて自慢してたくせに……」

と、二人に聞こえるように独り言を言う。

「さつさと仕事に戻ってたの!!」

「うへっ！ 仁介さん、照れてやがるよ……」

「笑いながら、司郎は小走りに仕事へと戻って行った。『つたく、あいつは……。それじゃ椎葉ちゃん、上へ行くこうか』」

「はっ、はい……」

「呆氣にとられていた椎葉だったが、ようやく我に返り、先に歩き出した仁介の後を追った。」

「そうして案内された先には、立派なつくりの扉があった。扉の上にあるプレートには、かすれてしまっているが、何か文字が書かれてある、

「艦長…室？」

「通称は王の間。そしてこれが部屋の鍵」

「仁介はポケットから一本の鍵を取り出し、鍵穴に差し込んでひねった。がちゃりと音を立て、鍵が開く。」

「さ、入って」

「はい……」

「ドアノブに手をかけ、椎葉は扉を開いた。」

「そこは思ったよりも狭く、頑丈そうな机と本棚、そして眺めの良い窓があるだけだった。」

「それじゃ、継承をしようか」

「なんの緊張感もなく、仁介はさりとそう言った。」

「さつきも言ったけどね。クーウォンは元々は宇宙を飛ぶ船だった。クーウォンを始めとする300隻の船には、およそ50万人の人々が乗っていたらしい。約800年前、なんらかの事情があつて、その船団はこの星に降りてきた」

「船はもう飛び立つことはできなかったのだという。この星での生活を余儀なくされた彼らは、それまでの過去を捨てる事にしたのだという。」

「過去を……捨てる？」

「そう。自分たちがここにやって来た理由を、彼らは子供たちにいつさい伝えない事にしたんだ。記録は全て抹消し、過去に関する情報には箝口令が敷かれた」

「船のほとんどは解体され、人々が暮らすための資材となり、旗艦であるクーウォンを初めとする数隻だけが、各地の島々に散らばって暮らす人々の輸送手段として残された。」

「それがクーウォンの、そしてこの星に人が暮らすようになった成り立ちさ」

「だがクーウォンの艦長は、いつか人々が、自分たちがどこからやってきたのかを考える時期が来る事を予期していた。」

「だから……それを知る人間を……」

「その通り。王というのは、過去にあった事の一部を知
る人間の事なんだよ」

最初は王という呼称ではなく、艦長という呼称で呼
ばれていたのだという。だが、いつの頃からかその名
は失われ、「王」という通称の方が残っていった。

「そして、その机の中に一冊の本がある」

「本ですか？」

「そう。このクーウォンの操作マニュアルだよ。もう飛
び立つことは出来ないんだから、役に立つことはない
けどな。そして、星見と羅針盤が持っている鍵とい
うのは、クーウォンの動力を起動させるための鍵なんだ。
それだって、もう使えないけど」

そう言っ、仁介は苦笑した。

「初代艦長が任命した二代目の艦長つてのがね、彼の娘
だったんだけど、名前を久遠って言っただ。初代
艦長の名前は伝えられてないけどな」

「久遠……」

椎葉はその名を口にしてみた。どこか寂しげな、な
んとも不思議な響きのする名前だ。

「だから僕は、第33代久遠なんだけど、実は艦長とし
ては34代目なんだよ。ついでに言えば、クーウォンつ
ていう船の名前も、その初代艦長が付けた名前なんだ
そう。そして、久遠って名前には意味がある」

「意味？」

「いつまでも、時間が終わりなく続くという意味だそう
だ。要するに『永遠』って事だね。それと同時に、久
遠という字そのものが示す意味も、初代艦長は付け加
えたかったらしい」

久遠。

「……久しく、遠い？」

「そう。産まれ育った故郷のことを差しているんだつ
て、先代の王は言っていたよ」

そして、初代艦長が名付けたという「久遠」の名は
代々受け継がれていく。久遠から三代目艦長へ、そし
て仁介から椎葉へ。椎葉から次の誰かへと。故郷を想
う気持ちを込めて、久遠に続いてゆくのだ。

「私は、34代目の久遠として、どうすればいいんでしょ
うか？」

「何もしなくていいと私は思うよ。ただ、かつて過去を
持っていた人達が居たことを、忘れなければいいん
じゃないかな？ 王は存在する。王しか知らない事を
知っている。でも日常において王は必要ない。ただ、王
が居ることだけは知られている。意味なんて、椎葉
ちゃん自身が考えればいいんだ」

「はい」

王とは何かなんて、判らなくて当然だったのだ。そ

の問いに答えなんてないのだから。答えがないとい
うことを受け入れ、そのニュアンスだけでも掴めるよう
に、自分なりに模索し続けなければならない。

なんとなく、そんな気がした。

「椎葉・ユリオ」

急に真顔になって、仁介が椎葉の名を呼んだ。

「第34代クーウォン艦長として、第35代クーウォン艦長
ならびに第34代久遠として、久遠・椎葉・ユリオを
名乗り、その名を次代に伝えることをここに命じる」

「……はい。わかりました」

そしてクーウォンは、今日も海を進む。

あとがき

一年ぶりのコミケ参加でございますが、出たのはこんな
感じの、とりとめのない内容のものになってしまいました
た。とにかく時間がなく、突貫作業で一気に仕上げた割
には、自分なりには集中できていい時間を過ごせたよう
に思います。

今作については、イメージみたいなものだけはずっと昔
からあったものなのですが、実際に話になるとなると、
どういつ話にしているものやら悩まされました。

で、その結果がこれです。どうも僕って奴は、短編で
はこういう傾向の、盛り上がりも何もなし話を書きたが
る傾向があるようです。次があるとすれば、もっとメリ
ハリのある短編を書いてみたいなー、とか思ってます。
……って、次がいつだか判らないけど。

何はともあれ、この一年はホントに色々ありました。
さて、次の一年はどうなるんでしょうねえ。はてさて。
それでは、またどこかで。

橋本竜也